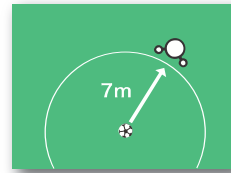


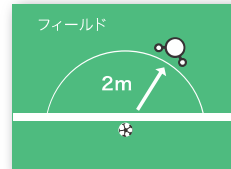
フリーキック

ボールがインプレーになるまで相手競技者は7m以上ボールから離れる。



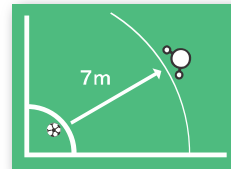
スローイン

相手競技者は、スローインが行われる地点から2m以上ボールから離れる。



コーナーキック

ボールがインプレーになるまで相手競技者はコーナーアークから7m以上離れる。



延長戦およびPK方式

(勝者を決定する必要がある場合)

- ① 前、後半それぞれ3分ずつの延長戦を設けることができる。
- ② PK方式において、両チーム3人ずつの競技者がキックを行ったのち、両チームの得点と同じ場合は、同数のキックで一方のチームが他方より多く得点するまで交互に順序を変えることなくキックは続けられる。

	1本目	2本目	3本目
Aチーム	○	×	×
Bチーム	○	○	けらない

	1本目	2本目	3本目
Aチーム	○	○	○
Bチーム	○	×	けらない

	1本目	2本目	3本目	サドンデスとなる	
Aチーム	○	○	×	○	×
Bチーム	○	×	○	○	○

1人審判法

主審ひとりで試合を運営する

サッカーは、競技者同士がお互いを尊重し、競技規則にしたがってプレーをするものです。反則をしないように、相手競技者にチャレンジします。ボールがフィールドから出たら、出した人が相手チームにボールを渡しても良いでしょう。

それでも、間違っって相手競技者をトリップしてしまうこともあるでしょう。どちらがボールを出したのか分かりにくい場面もあるかもしれません。審判員はそんなとき、判定をするなど競技規則を施行して、試合を運営していきます。

競技者自身が違反をしないでプレーをすることを心がけることによって、さすがしく、楽しいサッカーがプレーされます。決して競技者は、審判員に見えなければ何をしてよいということではありません。競技者だけでなく、指導者やサポーター、審判員も、お互いを理解し、協力しあって、一緒に素晴らしいサッカーを作り上げましょう。

一方、ひとりで主審を務めているのだから違反が見えなくてもよいとか、競技者自身が規則を守ろうとしていないのだから違反を罰さなくてもよいというものではありません。競技者は一生懸命プレーしています。それを保障できるよう、ひとりで主審を務めていても試合をうまく運営できるように、最大限の努力をしましょう。

そのためには、ゴールラインをギリギリで越えて得点になるかならないかの場面でもきちんと判断し、オフサイドの反則もひとりで判定できるように、首を振って競技者の動きなどを事前に見ておくことや、主審の位置取りやそのための動きについてしっかり実践できるように準備しておく必要があります。

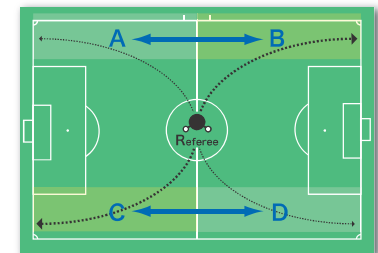
1. 位置取りと動き方

正しい判定を行うためには、良い位置取り(ポジショニング)が重要です。プレーから遠すぎれば、細かな動きは見えません。といって近すぎれば、全体像を見失ってしまいます。

プレーから離されることなく、しかし、オフサイドの判定も行うために広い視野を確保できる位置取りが必要になります。

普段、副審と一緒に審判を行う場合、ベンチから見て右側奥方向からから左側手前方向に動く(図:C⇔B)こととなります。しかし1人審判法の場合、副審はいないので、逆の対角線(A⇔D)で動いても、試合中、対角線を自由に変えることも可能です(C⇔B⇔A⇔D)。必要であれば、B⇔AやC⇔Dに直線的に動くこともできます。

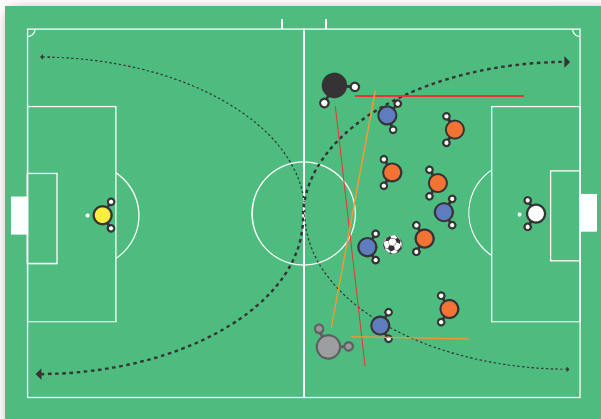
ただし、フィールドの中央ばかりに位置したり、中央を縦に動くことになれば、プレーの邪魔にもなりやすく、プレーの全体を視野に入れることができなくなるので、そのような位置取りは避けます。



● 具体例 1

主審は、「ボールを中心とした争点」と「次に展開がされそうな場所」を見ることができ
る位置を取ることを常に心がけます。

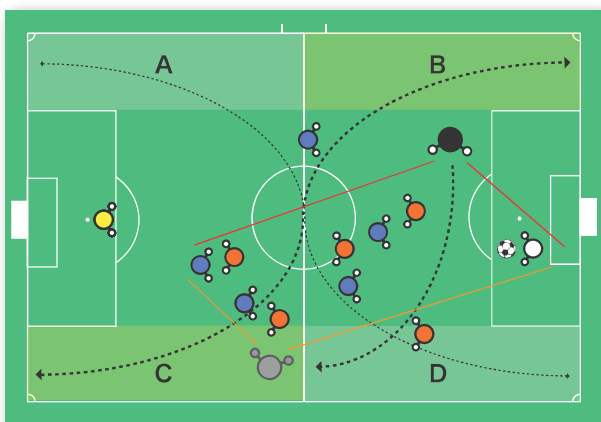
また、フィールドの大きさを考えて、プレーの邪魔にならないように動くことも必要です。



● 具体例 2

ゴールキーパー (GK) から逆襲が始まろうとしているときは、GKのプレーを視野に入
れながら、できるだけ早く次の争点を監視する位置に移動します。

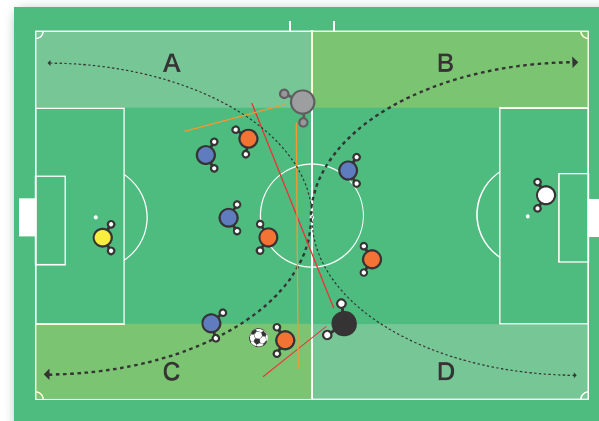
もしAの方向にボールがフィードされるのであれば主審はCの方向に、Cの方向にボール
がフィードされるのであれば、Aの方向に動くことが多くなります。



● 具体例 3

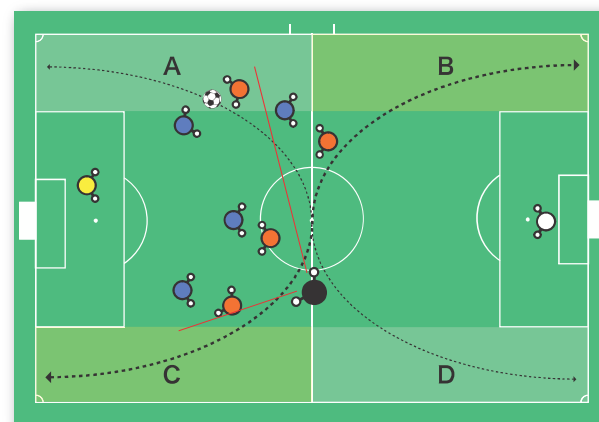
攻撃がゆっくりCゾーンに展開されたときは、プレーをやや後方から監視する位置に
移動することが一般的です(●)。

早い攻撃の場合や、次に展開される可能性がある場所を見通せる角度をとるために、
Aゾーンへ移動(逆の対角線へ移行して●の位置を取る)も有効な方法です。



● 具体例 4

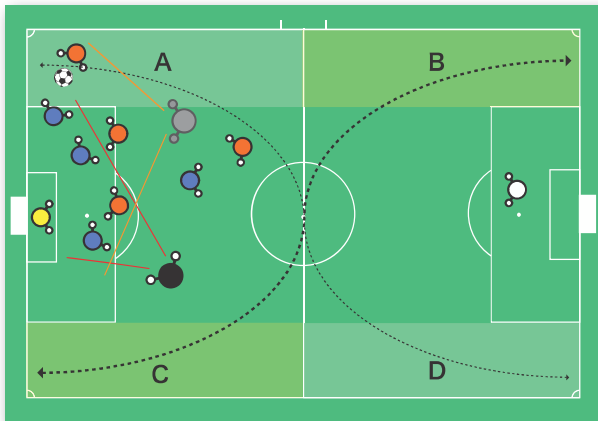
逆襲によりAゾーンに展開されるときは、BゾーンからCゾーンへの対角線を取りながら、
次にボールが展開される可能性がある場所を見通せる位置取りが大切です。



● 具体例 5

Aゾーンからクロスボールがけられそうなときは、やや中央に入り(●)、キッカーの位置とゴール前の争点を監視します。

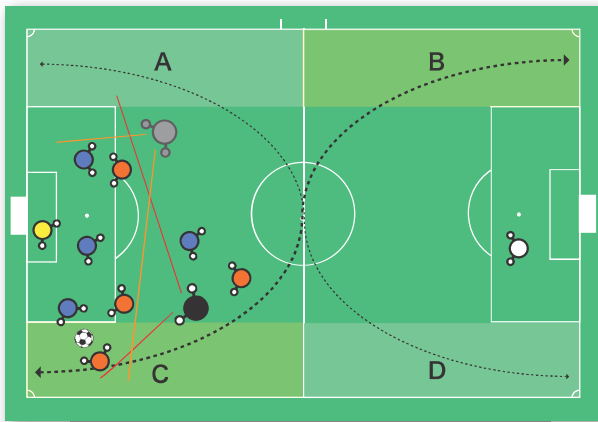
事前に●の位置を取っていたならば、やや後方からの監視が有効的です。クロスボールが入った後に、やや中央へ移動します。



● 具体例 6

具体例5とは逆にCゾーンからクロスボールがけられそうなときで、事前に●に位置していた場合、やや後方から、キッカーのところとボールがけられるコースのゴール前の争いが見えるようにします。

もし●側に位置していた場合、やや中央に移動しながら、プレーや次の争点を監視します。



2. オフサイド

ひとりで審判する場合、もっとも難しいのがオフサイドの判定です。一度に前線の競技者とパスを出す競技者を同一視野に入れることが最良の方法ですが、なかなかそうもいきません。

であれば、パスが出されそうなときに前線の競技者の位置を確認しておき、パスがだされた直後に、パスのスピードと前線の競技者の位置を再確認し、前線の競技者の移動のスピードも考慮したうえ、オフサイドなのかオフサイドでないのかを判断することもできます。

3. ボールがフィールドから出るか出ないか

1人審判には副審がつきません。副審は自分の位置するラインの横からぎっちりボールのイン、アウトを見極められますが、ひとりの場合ラインから出ているのか出していないのかなかなか見極めが難しいので、日頃の訓練によって、その感覚を養っておく必要があります。

4. 補助審判

8人制サッカーでは“補助審判”が任命されますが、補助審判は補助的な審判員であるので、決してファウルの判定や警告をすることはできません。また、ボールがフィールド外に出たのかどうかを判断することも、その任務ではありません。しかし、主審が試合を運営するにあたって、様々な事象に対応することによって、主審を援助します。

その重要な任務に『交代の管理』があります。8人制サッカーではボールがアウトオブプレー中だけでなくインプレー中でも競技者は自由に交代要員と交代することができます。ボールがインプレー中に交代が行われることを主審が管理することは大変難しいので、補助審判は『交代の管理』をする必要があります。

また、主審とともに試合の記録を取ることも任務のひとつです。得点や警告、退場だけでなく、グリーンカードの提示など試合の記録を取って、主審が間違えて2度目の警告だけで終わらせてしまうような場合や、ベンチにいる交代要員などがリスペクトある行動をした場合、主審に知らせることも大切な役割です。

グリーンカード

子どもたちは、サッカーを通して「全力を尽くすこと」、「助け合うこと」、「フェアに戦い、仲間を大切にすること」、「サッカーを楽しむ環境を与えてくれる人に感謝すること」を自然に学んでいます。

このようなポジティブな行動がサッカーの精神に基づいたものであるとき、大人たちはそれをほめたたえます。子どもたちは、その行動を認められることによって、さらに成長していきます。

フィールドにいる22名（16名）の競技者全員が、サッカーの精神に基づいてプレーに集中して戦っている中で、ポジティブかつリスペクト溢れる行動をしたときに賞賛や感謝を示す方法の1つがグリーンカードです。

全力を尽くす、お互い助け合う、フェアに戦う、仲間を大切にする、サッカーを楽しむ環境を与えてくれる人に感謝しているなと感じたならば、グリーンカードを示します。

グリーンカードを提示するときに注意することは、

- 「試合の流れを止めない」
- 「ポジティブな行動の意図を見極める」
- 「躊躇せずに示す」
- 「誰に示されたのか分かりやすいように」
- 「声やジェスチャーのみをほめたたえるのもよい」

サッカーに携わるすべての人を「互いに大切な仲間」と思い、お互いフェアに競い合い、身につけてきた技術や戦術を精いっぱい出し合ってプレーする。そんなプレーや行動が自分自身のものになって、美しい心が育ちます。サッカーの指導者や審判員は、美しい心を伝えてくれるような感動あるプレーや行為を子どもたちがしたときに、グリーンカードを示してください。



8人制サッカールールと審判法

2009年10月31日 第1刷発行
発行所：財団法人 日本サッカー協会
〒113-8311 東京都文京区サッカー通り(本郷3-10-15) JFAハウス
TEL:03-3830-2004(代表)